

「甲州御牧庄」の墨書銘は、上代において牧庄の範囲を示す最もよい資料であるとともに、牧庄が「御牧」と呼称されていた証左ではなからうか。

また前述した昭和三十七年二月に東山梨郡勝沼町柏尾白山平から、康和五年（一一〇三）銘の経筒、及び付属品が発見された。経筒には長文の銘文があり、康和五年四月に僧寂円が如法経一部を埋納したことが記されており、寂円は山城国乙国郡石上村の人で、康和二年（一一〇〇）正月のころに甲斐国に至り、山東郡内牧山村米沢寺千手観音宝前に籠居して如法経を書写し、四年の歳を経て満願となり、康和五年三月二十四日道俗男女を誘って柏尾山往生院仏前に伝書し奉り、同年四月三日叡山学者堯範を囑して開講演説し法会をなした。同月二十二日に白山妙里之峰所に埋納し奉ったのである。

この如法経埋納の結縁の衆中に、藤原基清、佐伯景房、三枝宿弥守定、同守継等の名前が見える。この経筒が埋納されたのは勝沼町白山平であるが、如法経を書写したのは「山東郡内牧山村米沢寺」とあり、この牧山村米沢寺は、当町杣口の地で「米沢寺」とは米沢山大禅寺または雲峰寺のことである。この寺は金峰山の里宮金桜神社の別当寺である。社記によると仁寿元年（八五二）三月十一日円珍大阿闍梨師が勧請云々とあり古社である。この経筒に記されている牧山村は最も古い表現であり、牧庄であったことを実証している。以上二つの資料からみて、牧庄は金峰山周辺まで及んでいた。古い御牧が庄園となったものであることがうかがえる。

第二節 安田義定と牧丘

安田義定は長承三年（一一三四）三月十日、現在の北巨摩郡須玉町若神子に生まれたと伝える。武田系図によると清光

の四男となっているが、吾妻鏡によると「安田冠者義清が四男」とあることから義清の子供でありそれも三男で清光の弟と考えられる。北巨摩における清光の業績はあまり伝わっていないが、安田義定について見ると、高根町熱那、熱那庄八幡神社の社記に「八幡宮御像は当国武田之元祖新羅三郎義光末孫安田三郎義定公御勧請ニ而御座候」とあり、八幡宮御像は義定の勧請とあり、土地の伝えでは社殿を義定が再興したと伝えている。

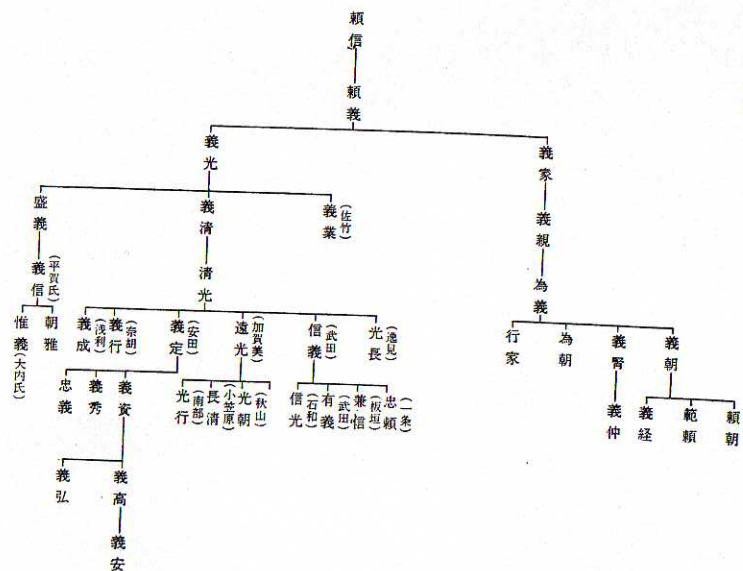
これからみるとひとところ北巨摩に居住していたことがうかがわれる。彼が峡東に本拠地をもったのがいつであったか、「安田」と名乗る本貫地はどこであるのか明らかでない。ただ父義清（祖父ともいう）が「吾妻鏡」によると「安田冠者」といったことがあるので義清の所領を受けついでではないかと思う。

広瀬広一氏は、逸見の旧地名に「アナ」「アツナ」という地名があるが、はたして安田に当たるかどうかとしており、また安田系図をみると紀州ともいう。それは平安中期から紀州に安田（保田）庄があり、のち義定の嫡子義資の子義弘が、紀州の保田庄を継いでいることからである。

また考えられることは長寛元年（一一六三）に起きた八代町の熊野神社領をめぐる八代庄の事件の意見裁状の「長寛勘文」の中に八代庄付近にある長江、安多の二庄も八代庄に年貢を納める加納田として熊野社領に加えられた記事である。この中にみえる「安多」の位置については明らかでなかった。一般には「あた」と読むようであるが、「やすだ」とも読める。同じような話しが安田氏とかかわりのある紀州、今の和歌山県にもある。

「紀州統風土記」の山保田庄の記事をみると、阿多（あた）が安田（あた）になり、それが耶須太（やすだ）になって保田と書くようになったとする。こうしてみると甲斐の安田氏もあるいはと考え、安多庄が義定の本貫地であったと考えても不思議はない。その安田庄であるが史料のうえではまったく不明である。

安田氏が晩年統治していた庄園を見ると、当町を中心とする牧庄と、加納庄であると伝える。牧庄については前述し



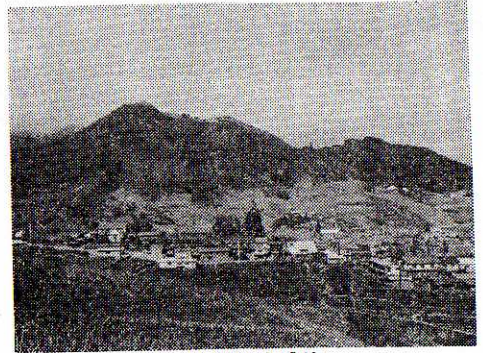
たが、加納庄は現在の山梨市上神内川のあたりという説と、一宮町金川原とする説がある。安田氏とかかわりのある史跡からしてみると、小原の館跡、雲光寺、窪八幡神社等からみると、山梨市説をとりたいたが、長寛勅文にみえる安多庄が加納田であるので安田氏の加納庄と一致することになり一宮説が位置的にみて考えられる。

治承四年(一一八〇)八月二十五日、義定は工藤庄司景光、同子息小次郎行光、市川別当行房らと石橋山の合戦を聴き、駆けつけたことが「吾妻鏡」にみえており、甲斐源氏の最初の出陣である。このとき義定と行動をとりにした工藤庄司景光は「異本會我物語」によると、大草郷・芦倉村・奈良田が知行所であると記されている。一方の市川別当行房は市川庄の庄官であった。この市川庄は弓削神社と平塩岡の平塩寺の寺社領を平安中期のころに比叡山に押収された。その後、別当職すなわちこの庄の庄司に市川行房が補任された。「尊卑分脈」に義清が市川庄に配流されたとあるが、この市川庄であり、たんに流罪されたのではなく、二ノ宮系図にみえるように義清は甲斐の目代と市川郷の一部青島庄(市川大門町高田)に赴任したのである。広瀬一氏によれば、市川氏は工藤氏の同族で、「平安末期より東国において伊豆、甲斐、駿河の辺にいた」といっているが、ともかく源氏勃興に大きなかわりをもった豪族である。こうしてみると甲斐源氏最初の旗挙げをした安田義定と工藤、市川氏は最も近い地理条件のところに支配地があったと思わなければならぬ。義定が峡東に入って来るにあたって諸説がある。一つは若神子の伝説からして北巨摩から山越えに、御岳金桜神社から黒平峠を経て牧丘町西保に入った説と、もう一説は笛吹川をさかのぼったという考え方である。それは父義清(一般には義定の祖父)の所領としていた市川庄、青島庄から笛吹川をさかのぼり、加納庄、大八幡庄、牧庄に入ったのではないかとする説である。治承四年の挙兵の時点を考え、工藤、市川氏との関係だけからみると後の説の方が素直に受けとれる。

甲斐源氏が甲斐国一円に勢力を伸ばした平安時代の末期は、今日の御坂町に国衙があり、旧豪族である三枝氏が峡東

一円に大きな勢力をもっていた。国志に「古人ノ伝ヘニ当筋ニ於會、萩原ハ三枝姓ノ分流ナリ」とあり、三枝氏の系図をみると、三枝守国には五人の男子があり石原、能呂、林戸、立河、隱會に分かれたとあり、さらに最初の於曾氏は守国の子供隱會ノ介守継であるという。牧丘町にもっとも近い三枝氏とのつながりを拾ってみると、塩山市の上萩原、中萩原、下萩原に三枝氏との関連がみられ、中でも上萩原に黒川金山や、鍛冶遺構があり下萩原に三枝氏の城といわれる平城や、御殿と呼ばれているところ、そして県の史跡に指定されている於曾屋敷、熊野神社というように、三枝氏に關係したものは多い。

藤木の放光寺の地名を「橋立」という。この橋立というのは、橋立明神からきた地名と思うが、一宮町周辺に多い神社で古社である。それも橋立明神といえは三枝守国伝説に結びついたものがほとんどである。従って放光寺の橋立も、寺の創立前は三枝氏の拠点の一つであり、橋立明神が祭ってあったのかも知れない。恐らく国衙が経営する御牧を三枝一族がここで管理していたものであろう。ともかく



小田野山城跡

三枝氏がこの峡東に非常に力をそそいだのは、一つには黒川の金山をはじめ、鉦山であり、もう一つは牧丘町を中心とする御牧、すなわち牧場の経営であったと考えられる。

安田義定がこの地を選んで入ってきたのもまったく同じ考えであり、源平の合戦がはじまるころには、三枝氏を抑え峡東一帯を支配するに至ったのであろう。牧庄の範囲の広いのもそうした経緯があったのではないかと推察できる。従って安田義定についての伝説は、牧丘町を中心に笛吹川の兩岸の地域ばかりでなく、上萩原にも安田伝説が残っている。

義定が山梨市の小原に館を構え、牧丘町小田野に要害城をもった。この小田野山城跡を大村和夫氏の研究を中心に次に列記する。

小田野山城跡は、東山梨郡牧丘町大字西保下地内の小田野山にあり、現在は西保下部分林となっている。標高八八二メートルの山林でこの地に義定が要害城を築いたのである。この地方では城山（じょうやま）と呼んでいる。国志から小田ノ城跡の記事をみると

墟ハ下村・中村ノ中間ニ在ル御林山ナリ此処ハ殘簡風土記ニ巨麻郡東ハ限ニ小田ノ谷トアリテ山内広ク境ヲ巨麻郡ニ接ス古時ハ西保四村（中村・下村・北原・牧平）一鉢ニ小田ノ谷ト呼ビタルヲ中世牧ノ庄ヲ置キ牧場トナシ馬城（トリコメバ）ニ依テ中牧・武河・西保（保字疑ラクハ部ノ字ノ転訛ナラン）等ノ分名出来ルト見エタリ又小田氏モ此ノ処ヨリ出ツト云フ今存スル所ノ城跡ハ安田遠江守義定ノ要害ナリ山上ノ本丸ニ櫓跡荒呈アリ二ノ丸ニ竜石雌雄アリ三ノ丸ニ蔵王権現ヲ祀ル箭竹アリ叢生シテ節ヲ齊クス柳清水・烏帽子石・呼石（ヨバハリイシ）アリ外川子丑ノ方ヨリ回りテ溝トナル西保川ハ南麓ヲ東流ス此ニ至リテ鼓川ト名ヅク或ハ城溝ニ水ヲ蓄フル故ニ堤川トモ云フ今其ノ壅水処ヲ梁戸ト云フ岩石ヲ累積シテ水ヲ束ヌ山下ニ遠江守生害石ト云フアリ此ノ山霖

雨ニ会ヒ時アリテ鳴ル音雷ノ如シ里人ハ遠州宿怒ノ所為ト云ヘリ、居館ノ迹ヲ西ノ御所ト称ス碑アリ高サ二尺七寸文字ナシ地名ニ荒台・交申屋敷・新次屋敷・木戸口・市路・金屋敷・大門前・射場・空穂入・金山等アリ祖廟（社地十間ニ八間祖神ヲ祀ル処ナリ）神田・御幸田ナド云フ処アリ亭候山ハ難望ニアリ加賀殿陣場（小物成山ナリ）小田ノ山攻撃ノ時鎌倉ノ將加賀守某ガ所陣スルト云ヒ伝フ遠州ノ牌子ハ藤木ノ放光寺及ビ本村普門寺ニ置ケリ法諱ヲ宗覚ト云フ所崇祀ニ郷中ニ七所アリ里人今ニ七宗覚ト称スル

とあるように城山の裾より西保一帯を小田谷といい四方いづれも急傾斜にて、山は険しく天然の地理を生かした要害地である。この小田野山は裾の集落小田野区の普門寺より登山道が開かれている。城跡である山頂は本丸の荒呈跡で平坦地となっている。鎌倉初期の山城形式をとどめ、要害城としての要素を備えた地形で、四方の眺望に富む峻嶒な山である。南麓には鼓川が東に流れ、要害城の外壁として利用された。小田野山城跡は一つの郭を含め、三段階の山嶺からなりたっている。一段下った中央の嶺がこの郭跡で、ここには竜石と呼ばれる自然石が二つあり、これを雌竜、雄竜という。

三の郭は東側に一段下がった急斜面の中腹にあり、ひとつの嶺をなしている。三つの郭には人工的な平坦地があり、旧土塁跡といわれている。またこの地には蔵王権現を祀った石祠が建立されている。

山麓にある集落の名も小田野、法諭庵、城下、御所、馬場などいづれも城と関係をもつ地名が付けられている。現在の御所と呼ばれている集落が、山梨市小原の館に対して安田義定の西御所のあったところといわれる。

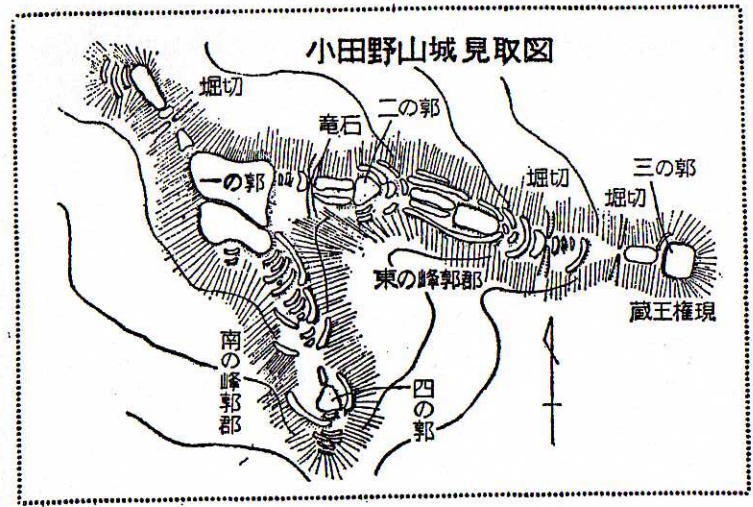
法諭庵は西保下にあり安田義定が小田野に城を構えるにあたり、禅の法を諭す庵寺を設け法諭庵と称したと云う。城下は小田野山に安田義定の要害城があったので城山の下ということである。また馬場は武術鍛錬のため設けた馬場である。そのほかにも安田義定に関連した伝説をもつ地名は金泥堂、荒台、築田、大門先、経塚入等がある。

また安田義定には安田四天王といって、橋田、竹川、岡、武藤の四人の武将がいたといわれ今日でも小田野山麓西

従って治承四年八月、頼朝が挙兵するまでは日和見の考え方であったが、一族の中でも武田信義、安田義定、一条忠頼等は剛毅一点張り、頼朝とは関係なく以仁王の令旨を奉じて独立しても兵を起さず覚悟であった。

治承四年八月二十三日、頼朝が石橋山の合戦に敗れると、二日後の二十五日、俣野五郎景久、駿河国の目代橋遠茂の軍勢が甲斐源氏を襲うために甲斐に攻め入ってきた。一方甲斐国からは安田義定、工藤庄司景光、同子息小次郎行光、市川別当行房が石橋山の合戦を聞き、駆けつけたところ波志太山で景久の軍と出会い、会戦となりこれを敗走させた。この出陣は安田義定の独立した軍事行動であった。一方北条時政・義時父子は事態を甲斐源氏に告げてその救援を請うため甲斐に赴いた。

治承四年十月十三日の吾妻鏡の記事をみると甲斐源氏ならびに北条時政が駿河に赴くことになり大石駅に止宿した。そこへ駿河の目代が富士の裾野をめぐる襲来するとの知らせがあったので、武田信義、安田義定以下甲斐源氏の面々は、石橋山の敗戦後甲斐に逃げこんでいた加藤太光員、加藤次景廉らを相具し、富士北麓若彦路から富士の西側を通っ



保、中牧両地内にその後裔といわれる家がある。

城古寺地区にある城跡「中牧城」または「浄古寺城」というが、この城跡は一説には安田義定が最初に築いたものであるという説がある。小田野山城に対して出城として用いたものかも知れない。

治承四年（一一八〇）四月、後白河法皇の皇子以仁王と源頼政が計り、平家追討の兵をあげた。紀伊国にいた源頼朝の叔父新宮十郎行家が、山伏姿で各地の源氏に平家追討を促す以仁王の令旨を伝えてまわった。伊豆の頼朝のもとに行家が来たのは、治承四年四月二十七日であった。この密使行家が甲斐源氏一族に伝えたのは「吾妻鏡」によると、伊豆の頼朝のところから甲斐、信濃両国に向かったとあり、「源平盛衰記」によると、行家は東山道より甲斐に入り、甲斐源氏に伝え、それから頼朝に伝えたとある。実際には行家の行動は明らかでないが、四月末から五月の初めには甲斐源氏の面々に伝えていった。行家が甲斐国をどのように回ったのか定かでないが、おそらく甲斐源氏の宗家ともいえる逸見氏の館に一族が集まり、以仁王の令旨をうけたものと思われる。

京都では以仁王、頼政の戦死の翌日「以仁王の令旨を奉ずる者があれば、これを討伐すべし」との院宣が出され、当時関東においても平氏の勢力は強く、治承四年八月ごろになると、関東源氏の動きに対して監視、警戒の目が鋭くなった。

当時の甲斐源氏一門は安田義定、武田信義を筆頭に一条忠頼、板垣兼信、逸見光長、加々美遠光、小笠原長清、武田有義、石和信光、平井清隆、河内義長、奈胡義行、浅利義成、安田義資など多くの宿将を擁して威名をもっていた。しかし以仁王の令旨に対しては、一族をあげて挙兵に賛意を表したのではない、加々美遠光、武田有義、秋山光朝、小笠原長清などのように当時平氏に仕え、また京都にあって坊官となった人々もあり、吾妻鏡にみる一族結集して頼朝に応じたものではない。

て駿河に到着した。その時に加わっていた甲州側の人たちをみると武田信義、次郎忠頼、三郎兼頼、兵衛尉有義、安田三郎義定、逸見冠者光長、河内五郎義長、石和五郎信光らであった。

この戦いで駿河の目代橋遠茂は生け捕りになり、長田荘司忠致は殺された。甲斐源氏と駿河の目代と戦っている間に、十月十三日数万騎の平氏の大軍が駿河手越駅に到着した。

治承四年十月十七日「吾妻鏡」は触れていないが「玉葉」をみると、大変な事件が起こった。それは武田氏以下甲斐源氏の一族からの使者が、平維盛の本陣を訪れて、富士山の麓、浮島が原で見参を遂げたい旨を申し入れた。これに對して平家の参謀忠清は激怒してこの使者二人の首を斬ってしまったという。このことは従来いわれているように、甲斐源氏ははじめから駿河黄瀬川に頼朝と行動をとるため、軍を動かしたのではなかった。従って北条時政父子等密使に對しても無視した行動をとった。むしろこの平維盛との会見によって状況は変わったかも知れない。この会見の目的ははっきりしないが、甲斐源氏の出した条件が認められるならば、軍事的妥協をはかったものである。おもうに甲斐源氏のねらいは、頼朝を中心とする東国武士を孤立させ、東国支配権の確立であったと考えられる。後日になって甲斐源氏との交渉について、京洛の公郷の中には惜しむ向きもあったといわれている。

吾妻鏡から翌十八日の記事を見ると、甲斐、信濃の源氏ならびに北条時政ら二万騎を率いて駿河黄瀬川で頼朝と参會したとあり、次の十九日に加賀美次郎長清が京都より駿河にかけつけた。この長清の意見もあって京都および関東の情勢を総合した結果、甲斐源氏一族が平家追討に意見が一致した。平氏は富士川の西岸に陣を構えたが、次第に脱落し、わずかに四千騎余であった。

こうして源氏軍は、駿河国賀嶋に至り、源平両軍は富士川をはさんで対陣したのである。十月二十日の夜半、平家の参謀長忠清の意見により、東征軍は富士川から撤収を決心した矢先のこと、武田信義は計略をめぐらして、平氏軍の背

後にう回しようとして行動を起こしたところ、たまたま富士沼に集まっていた数万羽の水鳥が、人馬の動きに驚いて一せいに飛びたつた。平氏の軍はその羽音を聞き、敵の大軍が攻めてきたものと錯覚して大混乱となり、一戦も交えず敗走した。

このときの様子を「源平盛衰記」は、この合戦の先鋒は安田三郎義定で、富士川の東岸に陣していた。武田太郎信義は甲駿国境にいて富士川を渡り薩陀山方面に出て、横ざまに敵の左翼を衝いたものと思われる。この富士川の戦いは一般には頼朝の大勝利の一つに数えた戦いであるが、実際には平維盛が率いる追討使の当面の第一目標がこの武田方、すなわち甲軍で、それが官軍にとって驚異的な存在であったのである。

彦田一太氏、広瀬広一氏は富士川合戦は完全に甲斐源氏勢力の軍事的主導権の下に行われとあり、富士川合戦の時点でも頼朝は決して反乱軍の総帥でなく、この連合軍の一将軍に過ぎなかった。むしろこの合戦の原因をつくり、挑戦状を送ったのは甲斐源氏であり、この戦いの軍事的指導権を握っていたことが明かである。そのため合戦のあと、頼朝は駿河、遠江両国を甲斐源氏の勢力圏と認めて、坂東に引きあげていることでも納得できる。

この合戦の功績によって二十一日、頼朝は安田三郎義定を遠江守護に、武田信義を駿河守護に補任した。また二十三日には頼朝が富士川の戦いで功績のあった人々に勲功の賞を与えている。その面々を見ると北条殿及び武田信義、安田義定、千葉常胤、三浦義澄、平広常、和田義盛、土肥夷平などで本領を安堵し、あるいは新恩に浴したと見える。

この二つの勲功については「吾妻鏡」が頼朝を源氏の総帥としている点、作務的な記事と思われる。まず二十一日に安田、武田両氏に守護の補任である。この時点で頼朝は、まだ伊豆に配流の身であり、いわゆる朝敵である。この年の十一月七日の「玉葉」をみても、東海、東山、北陸三道に勅を下して源頼朝、武田信義らを追討する記事が見えているので、それ以前に頼朝に上級進止権などまったくなく、この権限が頼朝に認められるのは三年後の寿永二年（一一八三）

以降のことである。

また守護が全国に置かれるようになったのは、この年から数えて五年後の、文治元年（一一八五）十一月のことであるので、このときの内容は、敗走する平氏を甲斐源氏の安田、武田氏が追跡して、安田義定軍が遠江国を、また武田信義軍（平家物語では一条忠頼）が駿河国を占拠したもので、けっして頼朝から与えられたものではなかった。そのことは安田氏が遠江国の豪族と、しばしば争うことから伺われる。

このことについて安田元久氏は「鎌倉幕府と源頼朝」のなかで、これまでの甲斐源氏の実績をそのまま頼朝は容認したわけである。この東海道の要地ともいえる二カ国を甲斐源氏に委任することは、頼朝の勢力の一步後退ともいえる。敗走した平氏の軍は、再度にわたって追討使を任命し、養和元年（一一八一）二月七日、平通盛を大將軍とする三度目の追討軍が、尾張に襲来したとき、第一線の安田義定は、この形勢を飛脚をもって鎌倉の頼朝に報告している。これに対して頼朝は、直ちに和田義盛、岡部忠綱らの諸將を遠江に差し遣わした。と吾妻鏡は記しているが、このとき頼朝の兵がはじめて遠江に入ったのである。安田義定と頼朝の関係を、彦田一太氏は「頼朝と甲斐源氏の政治的配慮による表面上の友好関係である」として、武田、安田を総称した甲斐源氏としてみている。いずれにしても、このころから甲斐源氏と、頼朝との協力態勢ができあがったものと考えられる。

このような事態に対して安田義定は、養和元年二月十七日、浜松庄橋本辺に防御陣地を構築した。遠江の橋本辺が軍事的要害地であることは、この地が浜名湖のど元をおさえ、西より来る東海道の関門となっていた。陣地を構築した場所について「静岡県史」は現代の浜名湖今切辺と見る方が浜名橋の関係からいって穩当であろうと述べている。この遠江における源氏側の備えに対して、平氏の軍勢は容易に遠江まで進出し得なかった。

吾妻鏡養和元年（一一八一）三月十三日の条をみると、安田義定が浅羽、相良両氏を訴えたことが記されている。この

いきさつについては、「盤田市誌」をみると、それは平氏の来襲に備えるため、義定が橋本に赴いていた時のことである。陣地を構するため人夫を召し集めたが、浅羽庄司宗信、相良三郎は、義定に協力しなかった。その上徒歩の義定に対して彼ら二人は、騎馬のままその前を通った。いわゆる下馬の礼をとらなかつたことを安田義定が腹を立てたことが伝わっている。その後の吾妻鏡をみると三月十三日安田義定は、武藤五郎を使者として鎌倉に送り、遠江の浅羽庄司宗信、相良三郎らを罰することを訴えたところ、頼朝はその訴えをとりあげ、彼らの所領を没収したとあるが、これが頼朝の采配によるものかわ疑わしい。

その年の四月三十日の条によると、浅羽庄司が謝罪をし、安田義定のとりなしにより所領を返したとある。また寿永元年（一一八二）五月十六日には、外官禰宣為保が鎌倉に至り、安田義定のため遠江国鎌田の御厨を押領されたことを頼朝に訴えている。いずれにしても、安田義定の遠江国の支配は困難があった。

平安遺文掲載の蒲神社文書源某下文がある。

下蒲御厨

可早免除惣檢校清成免

蒲上下田畠在家并加徴米在家田米等事

右且任先例且依勤厚可令免除之状如件

治承四年十二月十三日

源朝臣（花押）

現在東大史料編纂所々蔵のこの文書が、偽文書でないとするれば、治承四年の源朝臣は、安田義定の下文であることとみてよい。彦田一太氏によると、この安田義定と推定される下文以前には所見がないとしており、遠江国を治承四年十月に攻略してその十二月には、蒲御厨を押えて在地支配に意をそそぎ、下文を出していることになる。

吾妻鏡寿永二年七月「平家追討使として東海道は安田義定、北陸道は源義仲が頼朝の代官となり入京する」とあるが頼朝の代官というのは誤りで、両者の上洛はまったく独自のもので頼朝とはまったく関係がなかった。源氏の上洛の様子を慈円は、愚管抄の中で次のように述べている。

カカリケル程ニ、七月廿四日ノ夜、事火急ニナリテ（中略）ケフアス義仲、東国ノ武田ナド云者モ入ナンズルニテ有ケレバ、サラニ京中ニテ大合戦アラランズルニテオノノキアヒケル程ニ、廿四日ノ夜半ニ法皇ヒソカニ法住寺殿ヲ出サセ給ヒテ、鞍馬ノ方ヨリマハリテ横川ヘノボラセオワシマシテ、近江ノ源氏ガリ此由仰ツカハシケリ、（中略）残ナク平氏ハ落ヌ、ヨソレ候マジニテ、廿六日ノツトメテ御下京有ケレバ、近江ニ入りタル武田先ズ参リヌ、ツツキテ又義仲ハ廿六日ニ入りケリ」

とみえるところから、ここでいう武田は安田義定のことであって、敗走する平家軍を追って最初に安田義定、つづいて木曾義仲が北陸から入洛したことを指す。

京都に入った源氏の中で、その最高責任者は木曾義仲であったが、実際の守護、警衛には義仲のほか源行家、源仲綱、安田義定、山本義経など十二名の諸将が、京都の町を地域分担をしていたことが吉記の寿永二年七月三十日の条に見ることができる。

京中の守護・義仲院宣を奉りて之を支配す
源三位入道の子息（大内裏替川に至る）
高田四郎重家・泉次郎重忠（一條より北、西朱雀より西梅宮に至る）
出羽判官光長（一條より北東洞院より西梅の宮に至る）
保田三郎義定（一條より北東洞院より東会坂に至る）
村上太郎信国（五條より北、河原より東近江境に至る）
葦数太郎重隆（七條より北五條より南河原より東近江境に至る）
十郎藏人行家（七條より南河原より東大和境に至る）

山本兵衛尉義経（四條より南九條より北朱雀より西丹波境）
甲斐入道成覚（二條より南、四條より北、朱雀より西、丹波境に至る）

仁科次郎盛家（鳥羽の四至の内）
義仲（九重の内并びに此の外の所々）

己上義仲の支配と云々

このように地域を分担して、各々の責任において支配がおこなわれた。彦田一太氏によると、次のように分類している。甲斐源氏一名（安田義定）美濃尾張源氏三名、義仲を含めた北陸勢（信濃源氏）三名、頼政流一名、行家一名、近江源氏二名、洛中源氏一名という内訳となり、総指揮者たる地位を、院宣を受けて得たのは、北陸勢の首領義仲であったが、その背景は案外に少なく、むしろ美濃尾張源氏をも含めた東海道の占める人数が多い。

とくに治承四年以来、東海道の中部で戦局滞期に、着々と自らの力をつちかかってきた甲斐源氏勢力が、東海道から入洛の中核であったと指摘しているが、中でもその首領は安田義定であった。また山本義経、甲斐入道成覚（甲賀の誤り）近江源氏は甲斐源氏の一族でもあり、京都入洛には安田義定に協力した人たちである。

安田義定が木曾義仲と並んで東海道から入京したことは、厳然たる事実でありながら、院が最初に呼び寄せたのは義仲と行家であり、法皇が七月三十日に公卿たちを集めて、源氏諸將の御賞を議したとき、功績は頼朝第一、義仲第二、行家第三であると宣言した。入洛にあたって一番の功績であった義仲より、頼朝を上にしており、また甲斐源氏についてはまったく無視しているが、これは法皇が当時の都が混乱のあまり、入洛した源氏の諸將について把握することができなかったのではないか。法皇はそれからまもなく八月のはじめに、平氏一門二百余人の官職を削り、その所領五百余カ所を没収して源氏諸將に分与した。

寿永二年八月十日源氏に対して初めて勅賞の除目があり、ここに甲斐源氏の中で安田義定が遠江守に任せられ、従五

位下に叙せられた。このとき義仲は左馬頭越後守に任ぜられ、従五位に叙せられている。また行家も備後守に、それぞれ補任された。先に戦功第一の頼朝に対してはこのとき復官していない。こうして義仲、行家、義定が頼朝の本位復官に先んじて叙位任官し、朝廷からその業績が認められたのである。頼朝が従五位下の位に復帰したのは安田義定より二カ月後の十月であった。

まもなく都では義仲と行家が対立し、法皇は頼朝の即時上京をうながした。頼朝は背後の藤原秀衡の脅威と畿内の飢饉を理由に、上京の無期延期を願うと同時に、勅令発令を要請した。

この勅令が佐藤進一氏が「鎌倉幕府訴訟制度の研究」「幕府論」で指摘している「十月宣旨」である。内容は「東海、東山両道の国衙領、庄園の年貢は国司本所のもとに進上せよ、もしこれに従わぬ者があれば、頼朝に連絡して命令を執行せよ」というもので、法皇は頼朝の要請どおり勅令を宣旨として公布した。同時に頼朝は「勅勘」を解除され、従五位下の位に復帰し、「朝敵」の汚名をも取ることになり、頼朝の外交政策が功を奏したのである。この十月宣旨公布は、義仲をはじめ甲斐源氏にとっては、大きな打撃であった。挙兵以来、以仁王の令旨を錦の御旗にして平氏追討に参画し、多くの功績をたてた義仲、甲斐源氏にも頼朝と同じ権利があった。しかし当時最大の問題である東海、東山道の土地問題に必要な一切の権限は、頼朝に与えられたのである。

そのため義仲はあせりをみせ、十一月天皇、法皇の御所法住寺殿を焼き、法皇の近臣を罰したため、法皇は頼朝上洛を求めた。甲斐源氏をはじめ諸国の源氏もしいに義仲から離れていったが、その反面独自で義仲に対抗する力はなかった。翌年元暦元年一月範頼、義経の軍が頼朝の名代として上洛し、安田義定、一条忠頼らの甲斐源氏と協力して義仲を滅ぼした。

この戦いを源平盛衰記でみると大手の総大将は範頼、副大将は武田信義、搦手の総大将は義経、副大将は安田義定と

決まった。熱田で二手に別れ、範頼は近江路を瀬田へ、一方義経方は伊賀路から宇治へ向かい、宇治川の壮烈な渡渉戦をやって、範頼より先に京都に入り、義仲を駆逐し、直ちに院の御所六条殿の守護についた。法皇は義経以下を召され、各々の氏名を御下問になった。総代将は源義経、副大将は安田義定、侍大将には畠山重忠、梶原景季、佐々木高綱らの名がつけられている。

甲斐源氏側で活躍しているのが安田義定と一条忠頼であったといわれている。とくに義定は院の御所守護の功績によって旗、幕、軍扇を下贈され、のちに軍扇を旗、幕の紋にしたと伝えられている。また一説には安田氏の紋は追州流であるという。

義定はこの元暦元年に牧庄橋立(塩山市藤木)に法光寺(現在の放光寺)を上萩原、現在の一之瀬高橋より移して創建し、賀賢上人をまねいて開山とした。このあと義定は現在重要文化財に指定されている大日如来、不動明王、愛染明王、そのほか阿弥陀三尊など都の文化を法光寺に移した。

吾妻鏡によると、元暦元年一月二十七日、安田義定、一条忠頼、源範頼、義経らの飛脚が鎌倉に参着し、義仲の討滅を報告しているが、この時点においては頼朝は東国支配権を確立しつつあったので、甲斐源氏安田義定、一条忠頼よりは上位にあったが、公式的地位の上では頼朝は散位従五位下前右兵衛佐であるのに対して義定は従五位下遠江守であったので同等であった。

義仲追討後の甲斐源氏の動きの詳細は不明であるが、頼朝と義定の間で、一族の中の逆臣の摘発を行っている。その筆頭に一条忠頼がいた。広瀬広一氏はこの問題について、治承四年源氏挙兵以来の問題であって、木曾義仲と結んで東山道より西上する約諾であったが、一族中の安田義定、北条時政の誘説に従い、東海道から進むことになった。また忠頼が義仲と粟津野に戦った時の戦況を察するに、義仲を北国に逃走させようとしたことなどが直接の原因であったとし

ている。

この問題については挙兵当時から武田、安田ら一族の勢力争いが原因していたことが駿河、遠江守護地においてもいえることであつて、とくに安田は頼朝と結び、信義は義仲と通じていたようである。この結果父の武田信義は富士川合戦において軍功がありながら、極めて不遇の処置を受けたのである。また忠頼の謀叛後においては、源平盛衰記に次の記事が見られる。

忠頼が父武田太郎信義を追討すべき由、頼朝下知に依りて、安田三郎義定は甲斐へ発向す、義定が為めには信義は兄也、忠頼は姪ながら寧なりけり、世に随ふ習とて兄誅罰に下りけるこそ無慙なり

とあるように頼朝が安田義定に命じて信義を討たせたと見える。

元暦元年（一一八四）二月五日の吾妻鏡の記事をみると一谷合戦の軍勢が見える。
 大手の大將軍は蒲冠者範頼なり、相従ふの輩、小山小四郎朝政、武田兵衛尉有義、坂垣三郎兼信、下河辺庄司行平、長沼五郎宗政、千葉介常胤、佐貫四郎広綱、畠山次郎重忠、稻毛三郎重成、同四郎重朝、同五郎行重、梶原平三景時等であり、搦手の大將軍は源九郎義経なり、相従ふの輩、遠江守義定、大内右衛門尉惟義、山名三郎義範、斎院次官親能、田代冠者信綱、大河戸太郎行、土肥次郎実平、三浦十郎義連等であつた。

大手の部將に副将格で武田兵衛尉有義、坂垣三郎兼信の二人が加わり、搦手副將に安田遠江守義定が国守としてはた一人加わつた。この義定の参加について彦田一太氏は、安田義定は搦手大將軍義経の軍の筆頭に挙げられ、吾妻鏡当該日条の記載を信用すれば、一応形式上義経の麾下に入っていることになっている。しかし朝官としてはまだ無位無官の範頼、義経より義定の方が上級であつて、事実、實際上の軍事策戦、行動においても、義定は自らの軍を独自の有し、義経、範頼とは対等の立ち場であつて、恐らくは純粹な連合軍的構成で行われたものようであると指摘している。また二月七日の吾妻鏡によれば、この合戦における平氏一門中の戦死者は、範頼の軍が討ち取つたものとして、平通

盛、忠度、経俊、義経の手によるものとして平教盛、知章、業盛、盛俊、そして安田義定の手として平経正、師盛、教経の合計十名となっている。しかしこの中で教経についてはのち屋島や、壇ノ浦の合戦で能登守教経が活躍したことが平家物語や、玉葉に見ているので誤りであろう。しかし安田義定軍の果たした功績は大きかつた。

元暦二年三月平氏は壇ノ浦に滅亡した。そして文治元年八月十一日に小除目があり、源氏一門の人々六人が任官、昇任された。吾妻鏡からみると新田義範は伊豆守に大内惟義は相模守に、足利義兼は上総介、加賀美遠光は信濃守に、安田義資は越後守に、判官義経は伊予守にそれぞれ任せられ義定、義資の安田親子は遠江守、越後守に任せられ、安田一門の全盛時代を迎えた。伝えによると義定の鎌倉での居邸は將軍頼朝の館の隣り、鎌倉大倉（のちの北条泰時館）にあり、鎌倉幕府創建につとめた。文治元年（一一八五）義経を滅ぼし、ついで藤原泰衡征伐のため奥州に鎌倉の大軍が進發しているが、このとき出發した面々を吾妻鏡からみると、

自鎌倉出御一御供輩

武藏守義信、遠江守義定、参河守範頼、信濃守遠光、相模守惟義、駿河守広綱、上総介義兼、伊豆守義範、越後守義資、豊後守季光、北條四郎、同小四郎、同五郎、式部大夫親能、新田蔵人義兼、浅利冠者遠義、武田兵衛尉有義、伊沢五郎信光、加々美次郎長清、同大郎長綱、三浦介義澄（以下略）

この中から甲斐源氏の諸將を拾ってみると、安田義定をはじめとして加々美遠光、安田義資、浅利遠義、武田有義、伊沢信光、加々美長清、同長綱、南部光行、工藤景光らであり、このほかに甲斐源氏の同族である平賀義信、大内惟義一門が加わっている。

この記載からみても、甲斐源氏の面々が上位をしめており、重要な位置にあつたことは疑いない。戦いは結果からみて一方的に藤原氏の敗北に終わった。この間の安田義定をはじめ、甲斐源氏の動向は資料がないため、内容的に皆無と

いえよう。

奥州征伐が終わると、頼朝を直接おびやかすほどの敵対的武力はなかったが、あえて危険の萌芽というべき一族は、甲斐源氏の一族であった。永原慶二氏は、この間の事情を、甲斐源氏は拳兵以来のもっとも有力な同盟者であり、源氏の同族であったが、頼朝としては内心もっとも恐れる勢力でもあった。彼らは初期においてはまだ半独立的勢力であり、安田義定が遠江「守護」となったのも、義定自身の要求とみられるほどであった。その後武蔵が平賀義信、相模が大内惟義、遠江が安田義定、信濃が加々美遠光、越後が安田義資というように、国守の地位を甲斐源氏一族が多くを占めていたことも、一見、甲斐源氏が頼朝政権のもっとも重要な支柱であったかのようであるが、事実はむしろ頼朝の敬遠策に出ているようである。と述べている。この点頼朝は源平合戦、奥州征伐をみても一つ一つの合戦においては甲斐源氏を利用してはいるし、地位も与えるように努力もしているが、一面、独立的権力のあるものに対しては注意深く機会あるごとに一族の削減をおこなっている。

安田義定は文治元年一月二十五日、法皇より京都の伏見稻荷社、祇園の両社の修理が遅れたり、六条殿造管の公事を努めないのを責められて、下総守に転任させられたが、吾妻鏡によれば、翌月十日頼朝は義定の転任のことを懇願し、書状を添えて朝廷に申し出ているが、義定の願いがききいられなかった。翌年の建久二年、ようやく竣工し遠江守に遷任し従五位上に叙せられた。この時代が安田一門の全盛時代であった。

甲斐源氏一門といえども、地方武士にすぎなかった彼たちが中央に雄飛することができ、それも義定、義資の親子はそろって遠江守、越後守を勤め、義定は浅羽荘の地頭をも兼ねて、頼朝の館の隣り鎌倉大倉に居邸があり、義資も名越の佐竹秀義邸の隣に接したところに落ちつくことになった。

吾妻鏡の建久二年三月三日の記事をみると鶴岡八幡宮の法会に、頼朝が参拝しているが、その御供に安田義資の名が

筆頭にみえており、安田一族の華やかな時代であった。

この年八月二十七日義定は、放光寺に梵鐘を一口寄進している。現在の鐘は建武三年、貞治五年と改鑄しているが初鑄は銘文にあるように義定の奉納によるものである。銘文に、

甲斐国牧庄法光寺

奉鑄施鐘一口

建久二年辛亥八月廿七日（以下略）

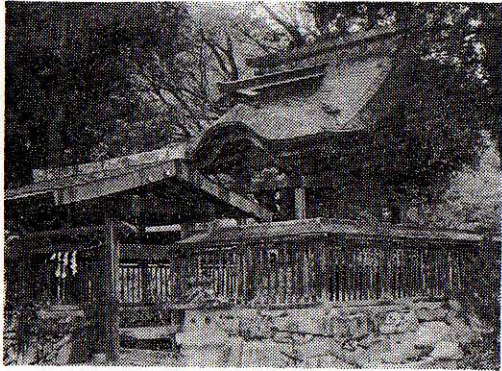
とある。

平家物語に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす、奢れる者久しからず」と巻頭にみえるが、決して平家に限ったことではなかった。安田一門にも建久四年（一一九三）にかけりをみた。

安田義資が起こした永福寺事件がはじまりである。安田義資も父義定と常に戦線をともし、幾多の戦功をあげ、鎌倉の御家人として従五位下、越後守となった。そのころ頼朝は、奥州の藤原氏の築いた平泉の中尊寺の二階堂を参考にした永福寺の建立に着手した。建久四年（一一九三）十一月二十七日、その落慶法要が盛大に挙行された。

義定の一子越後守義資も参詣し、かねて懸想していた梶原景季の妾竜樹ノ前に艶書を投じた。この事が二、三の女房衆の目に入ったので、義定も後難を恐れて披露しないように女房衆に口止めをしたが、竜樹ノ前の口から夫の景季に語り、景季は父の景時を通じて頼朝に言上した。頼朝はその真偽を糺明し確実なるを確かめ、翌日加藤次景廉に仰せ付けて義資を誅し、梟首にさせた。

問題は一通の艶書であったが、義資が没した十二月に義定の所領であった遠江守浅羽庄地頭職を頼朝は公収し、これを加藤次景廉に与えた。この景廉は石橋山の合戦の時逃れて甲州に入り、義定ら甲斐源氏再挙の援軍に従った者であ



宗覚七社若宮八幡

また同社の裏手北西一七〇メートルばかりの所に「ミミンドウ」といって墓所があり、五輪塔の地輪だけが残されており、その場所を安田義定の墓であると伝えている。岡泰元氏によれば「ミミンドウ」は「大御々堂」を省略して「御々堂」となり「ミミンドウ」と訛ったのではないかとしている。いずれにしても大御室すなわち大御堂はこの地にあったと思われる。

斐国馬木庄大井窪大御室被誅了」とある。

この大井窪大御室の大御室は、大御堂の誤りであり、法光寺だといわれており、法光寺（のちに放光寺と書く）には阿弥陀堂が往古にあったことから、大御堂と称したのだという説もあったが、岡泰元氏が「安田義定史跡考」の中で、大井窪は山梨市の大井俣窪八幡神社の地であると考証している。

義定は加納庄、牧庄を統治しており、館を山梨市小原に構えていたことは明らかである。この地は現在の八日市場を中心とする一帯であって、山梨駅より東方へ二キロ、青梅街道が鈎の手に曲がることから、町並を日下部保健所辺の西願寺に至る一キロにわたる地点が義定の館跡である。この館跡には今も土塁の一部が残っている。

窪八幡神社は館からわずかな地点にあり、義定との関係については窪八幡神社の略記に「斯く当社は帝都を距る僻遠の地に在りながら、皇室の崇敬厚く源平時代以後に至りては武人の尊崇特に深かりき」とあることからしても立証される。さらに窪八幡神社には安田義定を祭った「宗覚明神」が境内北側にあり、

る。

広瀬広一氏はこの事件について、ただの艶聞だけではなく、安田父子の栄進をねたみ、これを陥れんとした梶原らの奸謀に引つかかったものか、さもなくば甲斐源氏の正系を根絶せんとする頼朝、時政の日ごろの計略であったのではないかとみている。

翌年の建久五年八月十九日に父義定も殺されることになるのであるが、この原因について永原慶二氏は、彼ら甲斐源氏の中核であり、頼朝の對抗勢力として危険な存在だったというばかりでなく、義定は任国遠江に多年住みつくことによつて「遠江国ニハ彼郎従充」（仁和寺文書）と公家社会に知られるほどの領主制的勢力を扶植し、とかく独立の勢いを誇った点が頼朝のおそれるところとなり、殺される原因となったのであると指摘している。

吾妻鏡建久五年八月十九日の記事を見ると、

安田遠州梟首。去年子息義資を誅せられ、所領を収公するの後、しきりに五噫を歌ふまた日来好あるの輩類々相談、反逆を企てんと欲す、緋すでに発覚すと云々

遠江従五位上源朝臣義定年六十一

安田冠者義清が四男、

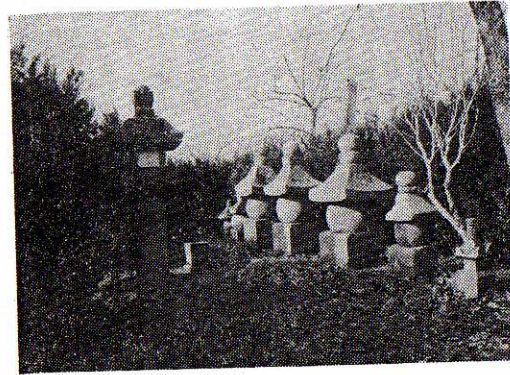
とありまた二十日の記事には

遠江守か伴類五人、名越の辺にて首を刎ねらる。いはゆる前瀧口榎下重兼、前右馬允、宮道達式、麻生平太胤国、柴藤三郎、武藤五郎等なり（略）

安田義定の最期について鎌倉大双紙によると、義定謀反の由を梶原がざん言したるにより、頼朝怒つて梶原と加藤次景廉を討手として甲州に発向させた。義定は法光寺において自害したが、その後義定の亡魂が荒出したので、恐れをなした法光寺に多聞天を造り、その亡骨を内に蔵め法光禪定門としたとある。尊卑分脈には「遠江守源義定（一本作義貞）於甲

また窪八幡神社上ノ坊普賢寺の記録を見ると「応神天皇は本地阿弥陀如来、仲哀天皇は本地釈迦如来、又神功皇后は本地地藏菩薩である」と見えるが、大御堂とはこうした八幡神宮の本地の阿弥陀像が、安置してあったものと思われる。

また山梨市下井尻、神竜山雲光寺の頭塔、寿仏庵跡に安田氏の五輪塔（県指定文化財）がある。おそらく甥の武田信光の建立したものと推定される。雲光寺は保元三年（一一五八）が山梨市宇井尻阿弥陀堂に開基した寺で、往昔阿弥陀仏があった。一説にはこの地で安田義定は自刃したという説もある。墓は中央が義定左右が義資、義季といわれ、そのほかに三十数基が数えられ、義定の百七十年忌に武田信成が、貞治二年（一三六三）に宝篋印塔を建立している。



安田一族の墓・山梨市雲光寺

もう一つの説は牧丘町小田野山麓である。これは中牧村誌にも見えるが、地元の中牧にはそれにもまつわる伝説が多い。義資の死後義定も甲州へ蟄居され、小田山に閉居したが、のちに頼朝の命を受け梶原景時、加藤景廉が討手として甲州に入り、義定六十一歳を一期として、小田谷の露と消えたとしている。時に建久五年八月十九日で、その翌二十日義定の徒党として家臣榎本重兼、宮地達式、麻生胤国、柴藤藤三、武藤五郎らは鎌倉の名越の辺で斬られたと伝えられる。没収された義定の遠江の所領は、加藤景廉に賜わり鎌倉の館は北条泰時が入居する。

小田野の山麓を流れる鼓川左岸に、安田義定とその一族の霊を祀る廟所がある。ここを石塚という。ここに宝篋印塔が建てられている。付近には義定の生

害石や腹切地藏尊があり、腹切地藏尊には正面に御生害跡と刻まれ、明和七年（一七七〇）の文字がある。この近くには呼ばわり石、亥申屋敷、木戸口、仮宿などの遺跡を物語る地名が残されている。山裾にある普門寺は、安田義定開基の寺といわれ、義定の位牌を安置する。

義定滅亡後「安田義定とその嫡流」を見ると義定の嫡孫義高を、武田に託したあとは、ちりぢりばらばらになった。義高の遺臣たちが主君義定の霊を祀りたいが、当時は梶原景則をはばかり、義定の法号を用い、宗覚明神として密かに祀っていたという。牧丘町の山間部落五キロ平方にわたるところに七カ所に宗覚明神が現存している。

- 中牧谷津の宗覚大明神（岡家奉祀）
- 中牧馬場の宗覚大明神（若宮八幡合祀）
- 西保中村の宗覚大明神（若宮八幡合祀）
- 西保芦ノ沢の笠石宗覚大明神（竹川家奉祀）
- 西保牧平の宗覚大明神（若宮八幡合祀）
- 西保北原の宗覚大明神（若宮八幡合祀）
- 西保膝立の宗覚大明神（若宮八幡合祀）

第三節 夢窓国師と牧丘町

一、浄居寺の開創

牧丘町における同町に關しての中世資料は、当初から予想されていた通りきわめてとぼしく、結局、満足し得るもの